図画工作科指導における単元設定
―『子どもの美術』における製作題材の基礎研究 ―

Unit Setting in Art and Crafts of Elementary school
― Focusing on basic research on production subjects in "Kodomono-Bijyutu" ―

中　尾　泰　斗
Taito Nakao

1. はじめに

本研究は、図画工作科教科書『子どもの美術』（1980年、現代美術社）における図画工作科指導法を製作単元の設定から検討したものである。

『子どもの美術』は、「商品ではない教科書作り[1]」を標榜し、1980年に新規参入教科書として作られた。しかし、採択数は全体の１％となり、現場への流布が少なかった[2]。一方で、出版時において各社の教科書を比較した文献では、掲載内容において従来のものへ積極的に問題提起した[3]とされる。また、『子どもの美術』は、近年において1980年度版が復刊され、再評価の機運が高まっている。このことから、『子どもの美術』を対象とした研究は、我が国の図画工作科教育で模索された多様な取り組みを振り返るためにも今後一層の拡充が求められる取り組みとなろう。

『子どもの美術』に関する研究には、教科書の編纂や出版に至る背景を明らかにすることで図画工作科教科書史上への位置づけを試みた検討がある（例えば西郷2014）。しかし、これまで教科書内容に触れた研究は少ない。関連する先行研究は、教科書の象徴的事例を紹介した資料（箕田、1980）や、６学年を平均した頁数と割合をまとめ、全体平均や総括的な特徴に触れた研究（冨安、1990）がある。これらの研究からは、『子どもの美術』が他の教科書と比べて絵画製作と鑑賞に重点を置いた構成であったと理解できるが、各学年の単元数や製作内容の傾向といった収録題材の整理には至っていない。

本課題の検討に必要となる観点が、教科書が目指したねらいである。この点については、教冒頭で示されている。例えば、第１学年は以下の文言となっている。

「（前略）きみのめでみたことや、きみのあたまでかんじたことを、きみのてでかいたりつくったりしなさい。こころを込めてつくっていくあいだにしぜんがどんなにすばらしいか、どんなひとになるのがたいせつか、ということがわかってくるでしょう。これがめあてです。[4]」
（下線部は筆者による）

そして、執筆において中核を担った佐藤忠良は『子どもの美術』の存在意味を以下と示した。

「図工科というのは、絵や工作品ができればよいというのではないと思うのですね。（略）図工科の目的が、人間をつくる - 感ずる心を開き、情緒や意志を育てていくためにあるのだったら、たとえ、週に一時間でも必要といえるでしょう。そこで私たちは、新しくつくるこの教科書の存在意味をそこに据えたのです。[5]」
（下線部は筆者による）

これらの資料から、『子どもの美術』の単元設定は、「感じる」や「心をこめる」製作活動によって、自然へのまなざしや人間形成の促進が意識されていると考えられる。本稿では、以上の仮定に基づいて『子どもの美術』（1980年度復刻版）における単元傾向を整理する。そのために、まず学年ごとの制作単元数を確認した。そして、各学年における単元設定の傾向をまと

め、教育課程における横断性や系統性を検討した。

なお、本稿での区分は冨安を参考に、立体製作において装置や仕組みをもつ物を工作、それ以外を塑像・造形とした。そして本稿における作品名等は『子どもの美術』の記された表記に従った。

２.単元設定と表現媒体

『子どもの美術』に掲載された単元は表１になった。表１からは、絵画製作が４-８題、版画が２題、塑像や造形が４-７題、工作が３-７題収録されたとわかる。このことから『子どもの美術』の単元設定において以下の要点が理解できる。

① 制作単元数は年間 15-20 題であった
② 学年別にみた場合、平面製作に比べ立体製作が多い傾向にある
③ 媒体別にみた場合、絵画製作が多い
④ 学年によって媒体の比重が異なる

表１　掲載された制作単元数

		単元数						
表現媒体		平面			立体			合計
		絵画	版画	計	塑像・造形	工作	計	
学年	1	6	2	8	7	5	12	20
	2	6	2	8	4	7	11	19
	3	8	2	10	4	5	9	19
	4	5	2	7	6	3	9	16
	5	4	2	6	4	5	9	15
	6	5	2	7	5	5	10	17
合計		34	12	46	30	30	60	106

３.各学年の傾向

『子どもの美術』に掲載された単元は表２となった。なお、小単元がある場合には単元直後に付した。以下に各学年における象徴的な事例を取り上げ、教育内容の傾向を確認する。

３－１.第１学年

第１学年は、人物を題材とした絵画製作が多く設定された。まず、「ぼくわたし」では、自画像が題材とされた。その中での小単元「ひとりひとりちがうかお」は、人間の顔立ちに違いがあるように絵も違いが出るという多様性の受容を目指した内容であった。そして、続く「かんがえてかく」では体の動きを検討することによって製作時間の長期化を認めるという、慎重な描画態度を促す問いかけがあった。この他、平面製作では「もののかたち」「どうぶつをかく」「かみはんが」

表２　製作単元の内訳

		表現媒体			
		平面		立体	
		絵画・描画材	版画	塑像・造形	工芸・玩具などの工作
学年	1	もののかたち ぼくわたし ・ひとりひとりちがうかお ・かんがえてかく たのしいえ どうぶつをかく ・すきなどうぶつがおおきくなったら うちのひと ・おじいさん ・うちのひとのしごと ・かぞく えにっき	かみはんが かみはんが　どうぶつのかたち	たのしいねんど ねんどのどうぶつ ふくろのどうぶつ あそんでいるひと テープのどうぶつ ひとのかお まちをつくる	ゆれるおもちゃ おりがみだこ おたよりいれ いちねんのこうさく かざりのついたぼうし いちねんのこうさく

	2	クレヨン・パスをつかって のりもの ・はたらくのりもの ・でん車のはなし ともだち 虫 ・虫とり みせ くうそうのえ	かみはんが（きりとりばん） かみはんが（だいしばん）	ねん土ののりもの じどう車と車こ うごいている人 どうぶつ	トロッコ ふりこにんぎょう かみづつにんぎょう かざ車 リュックサック おかしのはこ 二年のこうさく
	3	お話しをかく かわる絵 どうぶつをかく ・どうぶつを見てかこう ・どうぶつを思い出してかこう 水さい絵のぐをつかって くらしをかく ・ボールをひろう えんぴつは自分でけずる 花をかく おおぜいの人	紙はん画 紙はん画 ・台紙ばんと切りとりばんの 組み合わせ ・きれをつかって	お話から ・オオカミと七ひきの子ヤギ しろ こしかけている人 船	三年の工作 ひもでうごく人形 つなわたり まんげきょう かげ絵 ・グループでかげ絵を作る
	4	木と鳥 ・木の写生 ・鳥の写生 ・鳥と木 音楽のえんそう お話の絵 ポスター 住んでいる所の風けい	スタンプもよう 木はん画	木で作る鳥や動物 鳥や動物 力仕事をする人 オーケストラ お話から 屋台の店	四年の工作 メリーゴーラウンド 立方体のパズル
	5	友だちをかく 太陽のしるし 初夏のころ 生活をかく	切りぬき紙はん画 木はん画	サーカス 友だちの顔 運動する人 動物を作る	やじろべえ ビー玉ころがし パズル（ジグソウパズル） 紙と竹のふえ 土のふえとすず 五年の工作
	6	人物 しょう像画 わたしの願い 静物 お話の絵	木版画 木版画−共同制作	楽器を演そうする人 運動する人 二つで一つの立方体を作る 同じ形で多面体を作る ほって作る	額ぶち 六年の工作 こま 絵本のできるまで 動くおもちゃ

を通して、実体験から発想を展開させる題材が設定された。

立体製作では動物を主題とした単元が多い。それらは単元ごとに異なった素材を用いることで、材料に触れる経験と表現方法の多視点化が目指されている。また、工作は、折る、貼る、切るといった簡単な作業で

完成する内容となっており、製作物が自身の生活に根差した用途を持っているとわかる。

第１学年では、人物製作と動物製作が絵画と彫塑で共通した。顔の製作における構成は絵画が先に掲載され、掲載ページが隣接している。彫塑では顔の凹凸に対する理解を促しており、それは「かんがえてかく」と同様に、人間の構造を捉える意図があったと理解できる。

次に、動物製作は彫塑や造形が先に掲載された。それらは「テープのどうぶつ」において技法や技術が重視され、「粘土のどうぶつ」では思い出して造る製作法が設定された。これを踏まえて、実体験を重視した「どうぶつをかく」へ接続している。そして、「すきなどうぶつがおおきくなったら」にて平面製作で想像画を設定した。このような動物製作の一連からは、技術と観察に下支えされた表現へ向かう意図があると捉えられよう。

３－２.第２学年

第２学年は、乗り物が題材になっている単元が特徴的である。乗り物製作は絵画製作の単元と彫塑・造形における「じどう車と車こ」が並列して掲載された。その直後に「ねん土ののりもの」が設定された。

学習の特徴を振り返ると、絵画においては、親近感がある描画対象の選定や構造、用途の事前学習が求められた。その後に接続する「ねん土ののりもの」では、粘土の特徴を取り上げ、厚みや太さを表現するために適切な素材を用いる重要性が示されている。さらに、その後には、製作手順や技法に焦点化された「トロッコ」が配置されている。このような構成からは、馴染みのある対象を理解して、各表現媒体と使用する素材の特性に応じて製作を行っていくという学習の意図が窺える。

また、第２学年では工作も多く設定された。工作題材は、全体を通して紙を活かす素材や技法の提示があった。それと共に「トロッコ」、「かざ車」、「ふりこにんぎょう」、「二年のこうさく」では円の中心や支点、力点を決めるという、正確さや力学的な考え方を求める内容もある。以上のことから第２学年の題材は、人間の生活に根差した構成によって、多様な素材の使用経験と素材に対して適切な表現を学ぶ目的があったと理解できる。

３－３.第３学年

第３学年は、前学年までに見られなかった水彩技法や鉛筆の削り方等、描画材に関する項目が設定された。この学びを踏まえて、「花をかく」が配置された。その際には、絵具の選択や下描きを模索し、丁寧に進めることが促されている。そのような画材と描画の学びは花の美しさの描出という目的に帰結している。

そして動物画製作は第３学年において象徴的な単元といえよう。「どうぶつをかく」では、「どうぶつを見てかこう」から「どうぶつを思い出してかこう」への接続によって、見て描くことが描画への自信に繋がるという、製作態度の形成が示された。

この他、「ひもでうごく人形」、「つなわたり」、「まんげきょう」等の工作題材からは、必要とされる技術や仕組みが前年までと比べて高度に展開されていると分かる。また、グループ製作による影絵が設定されたことも第３学年の特徴といえよう。

第３学年は、絵画と彫塑で共通した題材が２点あった。まず、「くらしをかく」と「こしかけている人」では、人物の動きに合わせて体の形が変わるという、骨格を意識する内容が掲載された。両単元は、そのような人体構造を観察によって理解し、表現することが学習のねらいとなっている。次に、「お話をかく」と「お話から」では、童話から発想を膨らませ、表現につなげる一連が設定された。両単元では、児童が一番面白いと思った場面や作りたいと思った場面を抽出し、場面の情景を明瞭に表すことが求められている。また平面製作では、構成における色や形の自由な設定と、描画時に筆の種類を使い分ることで、児童の絵画表現が確立されてくるとしている。

３－４.第４学年

第４学年は絵画と彫塑・造形において動物製作が充実している。掲載の構成は、第２学年における乗り物製作のように、「木と鳥」をはじめとした絵画製作単元と「木で作る鳥や動物」の立体製作が並列している。その直後に彫塑題材である「鳥や動物」が配された。

一連の動物製作では、絵画において写生から自由画へと展開した。写生では、対象を丁寧に観察すること、

細部にとらわれず全体を意識することが学びの観点となった。自由画では写生の学びを基礎に、色や形を自由に構成し楽しく描くことを目的としている。絵画製作の直後に配された彫塑題材では、生命感の表現に重点が置かれた。その方法に、動物の動作を明確に表すことや、仕上げにおける質感の多様さの必要性、制作態度における勢いの重要性が記された。

また第４学年は、３学年と同様に「音楽のえんそう」と「力仕事をする人」にて人体の動き、「お話の絵」と「お話から」において想像から製作を展開する単元が設定された。第４学年では、指の動きや体の向き等より詳細な構造を理解し、「その人らしさ」を表していく態度が見られる。後者は、絵画製作においては児童自身の想像を第一義に置きつつ、お話しに登場する物の形等を事前学習しておく必要性が示されている。立体では製作のテーマの明確化と、塑像における用具の工夫を取り上げている。この他、第４学年ではポスター製作やスタンプ等、デザイン領域の傾向を見せる単元も設定された。

３－５.第５学年

第５学年では、学年を通して共通した題材に「友だちをかく」、「友だちの顔」、といった人物表現がある。それらの単元では、普段から触れ合っている友人を製作対象として改めて観察し、様々な新しい気づきを得ることが目的とされた。また、「友だちの顔」では、塑像製作で必要な心棒の作製法が紹介された。

そして、「運動する人」では、前年から引き続いて人体の動きを捉えようとする内容が含まれた。発問からは、これまでの学びを踏まえて、「動いている感じ」をいかに粘土で表現していくかが目的であるとわかる。

この他、第５学年では観察の重要性と表現の模索が示された単元が多くある。「初夏のころ」では視点の高低による見え方の検討や、新緑を表現するための緑色の多様性に気付くことが示された。また、「生活をかく」では自分の気持ちを絵画で表現するためにスケッチを通して人の動きを理解していく必要があるとしている。

３－６.第６学年

第６学年は、初等教育課程の最終学年であることから、1 - ５年生までを踏まえた内容が多い。その象徴的な単元が人物画といえよう。

人物画は、第６学年において「友だちをかく」や「しょう像画」で設定されている。本題材では、１年次と６年次の作品を比較し、現状では観察眼と描画力が備わってきていることを示している。しかし、１年次の作品の良さにも触れ、年齢間で生まれた観察力や描写力の差が作品の優劣でないとしている。そして、製作において重要な観点が真摯な描画態度の形成であると結んでいる。

塑像における人体の動きの表現も、継続して取り上げられた。第６学年では、前学年で取り上げられた心棒の製作を踏まえ、全身像に対応した心棒づくりを取り上げている。

静物写生に関しては、一貫して観察に注力することと、丁寧な描画への心がけが示されている。加えて、静物画製作ではモチーフの組み合わせや配置の検討について触れ、対話的にその課題を解消していくように設定している。

この他、第６学年では「二つで一つの立方体を作る」、「同じ形で多面体を作る」、「絵本のできるまで」、「動くおもちゃ」といった立体製作において展開図や仕組み、構成を学ぶ内容が置かれた。

４.単元の系統性

ここまでを踏まえて、冒頭に示した教科書のねらいである自然へのまなざしと人間形成の２観点を基にすると、『子どもの美術』の単元設定は「動植物に関する単元」「人体製作に関する単元」「日常生活に関連する単元」にわかれた系統性が見出せる。この点について、単元の教育内容を踏まえ検討する。

４－１.動植物に関する単元

動植物が題材となった単元は表３となった。各単元では、実際に触れ合って対象の特徴を体感していくことが重要視されている。そして、学年を追うにしたがって観察とその応用が意識された題材が設定された。すなわち、教科書の目的における「自然を感じる心」の体得が意識された題材群であったと捉えられる。

特に、絵画では写生が重要視された。その要点は小

表３　動植物に関する単元の内訳

		表現媒体			
		平面		立体	
		絵画	版画	塑像・造形	工芸・玩具などの工作
学年	1	どうぶつをかく ・すきなどうぶつがおおきくなったら もののかたち	かみはんが　どうぶつのかたち	たのしいねんど ねんどのどうぶつ ふくろのどうぶつ テープのどうぶつ	いちねんのこうさく
	2	虫 ・虫とり		どうぶつ	二年のこうさく
	3	どうぶつをかく ・どうぶつを見てかこう ・どうぶつを思い出してかこう 花をかく			
	4	木と鳥 ・木の写生 ・鳥の写生 ・鳥と木		木で作る鳥や動物 鳥や動物	
	5	初夏のころ			紙と竹のふえ 土のふえとすず
	6	静物			

学校課程全体を通して、丁寧な観察や描画時に全体を捉えながら進めていくことが示された。そして、単元では写生を基に、画面を自由に再構成するという一連が３-４学年で設定された。この点は、見たものを描く能力が成長する当該年齢の発達段階が踏まえられていると理解できる。その一連には、後の美術教育へと接続する表現活動の基礎的な位置づけが意識されていよう。

立体製作では教育課程を通して様々な素材に触れることが重視され、紙や木、落ち葉など身近な材料による製作が頻繁に取り上げられた。その中で、自然物から造形作品のイメージを獲得する手法は、素材の特徴や美しさを活かそうとする態度に繋がることが期待される。よって、立体製作では、製作題材と使用画材の両側面から自然に触れ、その特性を活かす内容があったといえる。

４－２.人体製作に関する単元

人体製作に関する単元は、表４のように配された。各単元では、一人一人に認められる個性や人体の造形に気付くことがねらいに設定された。その観点は平面製作と立体製作で共通した。

絵画では、家族や友人などの親しい人間を題材に取り上げる単元が頻出した。そこでは、身近に触れあってきた人間を創作対象として改めて観察し、新しい気づきを得ることが求められた。つまり、絵画製作における人体製作は、他者への新たな視点形成が目的とされている。そして、製作を通した最も重要な学びは、観察や描画を通して、感じたことや見つけたことを懸命に表そうとする描画態度の形成とされた。この点は、『子どもの美術』冒頭に示されている教科書のねらいが意識された問いかけと理解できる。

彫塑･造形単元は、１-６年まで一貫して人体の構造を理解し、表すという学習目標があった。単元の題材は、運動や仕事、遊びの瞬間を取り上げるという人体の動きを表現する題材が強く打ち出された内容となっている。それらは人間の営みにある動性を理解するとともに、動物製作と同様に、生物の姿を捉えようとする意識があるといえよう。『子どもの美術』は、著者らが「教育理念、哲学を、素直に子どもへ語りかけようときめた[6]」教科書である。立体製作において骨格や

表4　人体製作に関する単元の内訳

		表現媒体			
		平面		立体	
		絵画	版画	塑像・造形	工芸・玩具などの工作
学年	1	ぼくわたし ・ひとりひとりちがうかお ・かんがえてかく うちのひと ・おじいさん ・うちのひとのしごと ・かぞく	かみはんが	あそんでいるひと ひとのかお	
	2	ともだち		うごいている人	
	3	くらしをかく ・ボールをひろう おおぜいの人		こしかけている人	
	4	音楽のえんそう		力仕事をする人	
	5	友だちをかく		運動する人 友だちの顔	
	6	人物 しょう像画		楽器を演そうする人 運動する人	

表５　日常生活に関連する単元の内訳

		表現媒体			
		平面		立体	
		絵画	版画	塑像・造形	工芸・玩具などの工作
学年	1	えにっき		まちをつくる	おりがみだこ おたよりいれ かざりのついたぼうし
	2	のりもの ・はたらくのりもの ・でん車のはなし みせ		ねん土ののりもの じどう車と車こ	かざ車 リュックサック おかしのはこ
	3	くらしをかく ・ボールをひろう			
	4	住んでいる所の風けい		屋台の店	
	5	生活をかく			やじろべえ ビー玉ころがし パズル（ジグソウパズル）
	6	静物			こま 絵本のできるまで

構造、造形への気づきが重視された背景には、彫刻家である佐藤の教育観や専門性が示唆される。

４－３.日常生活に関連する単元

『子どもの美術』では、人間の営みや日常生活に即した題材が多く取り上げられた。表５で示すように、それは特に、絵画製作と工作において顕著であった。

絵画製作では、日常の情景を切り取って絵日記や表現に展開した。それらは、周囲の物や人間を理解することに重点を置き、絵だけで理解できる表現を心がけることが求められた。また、自分の居住地を描画対象にする単元も設定された。このことで、慣れ親しんでいる半面、感動の発見が少なくなった状況において、観察によって魅力を再発見する活動を組み込んでいる。それらの意図には、日常生活で意識しづらい機微を感じ取る心の育成が窺える。

工作では、玩具や日用品の製作が設定された。前項で示したように、教育課程全体を俯瞰した場合、製作課題は学年が上がるにつれ、製作技術が複雑化している。加えて、工作題材は製作物の使用を前提に設定されている。そこには、日常生活で接する様々な仕組みや用途、遊び方への気づきや工夫が促し、造形能力を向上させていくねらいが設定されていよう。

５.まとめ

冒頭に述べたように、『子どもの美術』は我が国の図画工作科教科書を振り返った際に、教育内容に特化した構成を見せるという点で注目できる。よってその内容研究は、今日に至る本領域の意義を省みる起点となるためにも、一層の拡充が求められる。

本稿のまとめから、『子どもの美術』の単元は、教科書作成の目的に即して、①動植物への気づき、②人体の理解、③日常生活における魅力や仕組みの再発見という３つの傾向があると分かった。それらは各論的でなかった。特に②は、人間関係と生きものとしての造形に注目していたことから①と③の両要素を含んでいたと捉えられた。

単元設定をより細分化すると、①絵画や彫塑・造形における人体製作と動植物製作、②様々な材料や素材、手順を学ぶ工作を中心に構成されていた。その傾向は教科書の目的において示された「感じる」や「心をこめる」製作活動に準拠して以下の特徴があった。

絵画製作や彫塑・造形製作の学びは、単元を通して製作対象や素材から「感じること」、「理解すること」「慎重に製作を進めること」が重視された。そして、特に絵画製作単元で示されていたように、児童の製作活動における最も重要な学びは、真摯な製作態度の形成であった。

工作単元は日常生活に即した題材にて、多様な素材に触れる取り組みが検討されていた。それは、季節や仕組みといった人間が生きていく上で体験や理解が必要な現象を学べるような学習配慮があった。すなわち、工作単元は、今日の小学校過程における生活科との類似を示唆させる題材であったと捉えられる。

『子どもの美術』では、お話から発展した想像画や描画材の用い方に関する単元もあるが、本稿では紙面の都合上取り上げられなかった。今後はそれらの構成や特徴、学習機能を検討し、本教科書の製作単元における内容研究を充実させたい。

註

1. 西郷南海子「『子どもの美術』の編纂経緯と採択の壁 -「商品ではない教科書づくり」の挑戦 -」『教育史フォーラム』第９号、2014 年、pp.61
2. 冨安敬二「図画工作教科書研究１- 魅力ある教科書を求めて -」『立教大学教育学科研究年報』第 34 号、1990 年、pp.40
3. 日本教職員組合 編『小学校教科書の研究　1980 年版全教科書の分析と批判』一ツ橋書房、1979 年、pp.278
4. 佐藤忠良・安野光雅『子どもの美術』第１学年、復刊ドットコム、2013 年（オリジナルは現代美術社、1980 年）pp.2
5. 佐藤忠良「私の教科書づくり」『子どもたちが危ない - 彫刻家の教育論 -』岩波ブックレット No.41、1985 年、pp.57
6. 註５に同じ

引用・参考文献

西郷（2014）「『子どもの美術』の編纂経緯と採択の壁 -「商品ではない教科書づくり」の挑戦 -」『教育史フォーラム』第９号、pp.61-82

箕田源次郎（1980）「教科書『子どもの美術』をめぐって」『教育』30（７）、国土社、pp.62-72

冨安敬二（1990）「図画工作教科書研究１- 魅力ある教科書を求めて -」『立教大学教育学科研究年報』第 34 号、pp.31-47